

# 母親の子どもに対する意識・感情と 対人関係の認知，人格特徴との関連

栗山 容子  
井尻多希子  
出井 まり  
河津 真子

## I. 研究の目的

子どもが母親との情緒的な絆を基盤に，母親を離れて自立していく過程は愛着の形成，分離不安の概念と理論的枠組みによって多くの研究成果が報告されている。(L. W. C. Tavecchio 他 Ed. 1987) 一方，母親研究として，母性とは何かという母性概念についての基本的な問いかけが研究ジャンルを超えて議論され，また母親の子どもに対する行動，意識や感情について調査研究が実施されてきた。(大日向 1988, E. バダンテール 1981, グループ「母性」解説講座編 1991) これらの研究から母親の子どもに対する意識・感情は，子どもが母親から心理的に分離・自立していく過程において重要な意味をもつことが示唆されている。

母親自身の発達課題として子どもの育児，養育の役割を捉らえてみると，母親自身も友人関係を広げ，確かなものにしながら，両親との心理的な分離を図り，また親密な特定の人—夫—との関係をつくりあげていくという過程で懐胎，出産を迎え，新たな人—我が子—との関係をスタートさせるといえるだろう。言い換えると，母親からの分離と自立という子どもの発達課題にかわる，母親の子どもに対する意識・感情は，母親自身のこのような発達の連続線上にあって，子どもの発達とかかわるという，重奏性の枠組みのなかで理解される必要があるように思われる。従って，母親の子どもに対する意識・感情にかかわる母親個人の外的，内的諸要因を明らかにし，それらの関連を明らかにしていくことは健全な子どもの精神発達を考える上で意義があ

ることと考える。

最近母親の意識や役割観を世代の違い（母親とその母）を超えた価値観の連続性において明らかにしていこうという試みが報告されている。（P. Martin 他 1991）幼児虐待などの病理的な母親の異常行動の理解のため、育児スタイルの世代間の類似点，相違点を明らかにしようというものだが，粗っぽいアプローチであるものの，子どもと母親の関係を支える内的・外的諸変数間の関連をできる限りとりあげていこうという意図は理解できる。

このような立場から，本報告では，まず探索的に，母親個人の発達線上的における外的な人的環境としての親や夫，友人関係を母親自身がどのように認知しているか，その基本的な対人関係の認知の構造を明らかにする。すなわち，両親からの心理的な分離と夫との関係の確立及び友人との関係の認知を相互関連的に検討し，これらの対人関係のありかたと母親の子どもに対する意識・感情との関係を明らかにする。

また，母親の子どもに対する意識・感情にかかわる内的な要因としての個人の人格的特徴をとらえるため，BSRI (The Bem Sex Role Inventory) を基に，性役割観に基づく簡略な人格特徴の測定を試み，それとの関連を明らかにしたい。我々が関心をもつのはタイプとしての人格特徴ではなく，育児という母親の役割をとっていき際，この役割をどのように認知し，遂行していくかという認知や行動のしかたを方向づけているところの人格特徴であり，これを問題にしていく必要があると考えている。S. L. Bem はBSRIにおける4つのタイプ間の個人の知覚や情報の処理のしかたの違いを検討しているが，説明概念として性スキーマ概念 (Gender Schema) を提起している。これは性に固有の現象が性にに基づく図式的情報処理によるものであるという仮説に立っているが，本報告では，母親の性役割の認知を方向づけ，育児行動を特徴づけている人格特徴を明らかにするという視点から，この人格尺度において明らかにされた人格特徴を解釈し，母親の子どもに対する意識・感情との関連を検討する。

第3にこれらの要因における各変数が母親の子どもに対する意識・感情を

どの程度説明し得るかを問題にしたい。我々が関心をもち、重要であると考ええることは母親と子どもとが共に健全に発達していくための“よい関係 (fitness/goodness)”を支える諸条件は何かということである。この問題を明らかにするための手がかりを得たいと考えている。

## Ⅱ. 方法

1. 調査の対象となった被調査者は東京とその近郊幼稚園、保育園に通園する5歳以下の乳幼児をもつ母親292名である。
2. 調査用具は次の3種類の質問紙から構成されている。
  - (1) 母親の子どもに対する意識・感情の調査：先行研究 (Kuriyama 他 1991) において用いられた36項目のうちから、先行研究の結果を考慮して、25項目を選んで質問紙を構成した。これは、被調査者の負担を考慮したためである。この調査は子どもの、母親からの心理的な分離とその不安が母親の子どもに対する意識や感情と関連しているという仮説から母親側の変数を検討するために作成されたものである。項目内容は表1にある。
  - (2) 対人関係の調査：J. B. Levine らの青年期用分離個体化尺度、Separation-Individuation Test of Adolescence (SITA)の日本版 (高橋 1986) を参考に、特に夫との関係の認知を問う項目を加えて、新しく母親用として24項目を作成した。Levine らのSITAは、乳幼児期における発達概念として、M. S. Mahler が概念を提起、臨床的立場から検討し、また P. Blos が青年期における精神障害の分析においてその理論を展開しているSeparation-Individuation の概念にその理論的根拠をおいて開発したものである。本研究においては、母親における発達概念としての理論的妥当性が問題になろうが、まず、この研究の目的に沿うよう調査項目の選定と作成を実施し、分析を行った上でこの点について検討する。この項目内容は表2にある。
  - (3) 人格特徴の調査：S. L. Bem によるThe Bem Sex-Role Inventory

(BSRI), 山口(1985)を参考に女性項目(BF), 男性項目(BM), 中性項目の30項目より構成した。これらの尺度を用いる根拠は研究目的の項で述べたが, 被調査者の負担を考慮して項目数を半分にした。項目の選択にあたっては文化的差異や翻訳によって項目の意味の一義性に問題のあるものを除外し, 先行研究より人格特徴が比較的明確に抽出されているもの, それぞれの下位カテゴリに含まれる項目数のバランスなどを考慮した。項目内容の一部を表3に示してある。

これらの調査はいずれも「よくあてはまる」から「あてはまらない」まで4段階で回答を求め, それぞれ4点から1点を付与して得点化した。

以上の他に母親の年齢, 子どもの数と年齢, 職業の有無とタイプ, 両親が健在かどうか, 同居しているかどうかを記入してもらった。ただし, 今回の報告ではこれらのデモグラフィックな資料との関連については触れない。

3. 調査は1991年2月-3月にかけて各幼稚園, 保育園を通して依頼し, 回収したが, 一部郵送によるものも含まれている。

### Ⅲ. 調査結果

#### 1. 母親の子どもに対する意識・感情の分析結果

因子分析の結果(主因子解を求め, バリマックス回転し, 解を求めたもの。以下同様), 7つの因子が抽出された(表1)。先行研究においては9つの因子が抽出されている。このうち「母親役割の受容」の項目がマイナスの因子負荷となり, 母親役割に対する否定的感情として育児不安, 育児負担と基本的に同じ構造をもつものとして抽出された。「子どもを1個の人格と認めること」の因子が第6因子と第7因子の2つに分かれて抽出された。第7因子は「親というよりも共に生活している仲間..」の項目に因子負荷が高く, 「別の1個の人間」「子どもの生き方がある」を内容とする第6因子と若干の意味の違いがあるが子どもと自分との境界がはっきり認知されていること, 先行研究では1つの因子にまとまっていることを考慮して1つの因子として考

えることとする。このような相違はあるものの、基本的構造においては先行研究と同じ構造が得られている。そこで、今回の結果を比較検討した上で、育児不安・負担-母親役割に対する否定的感情 (FM-1), 子どもの母親への密着-子どもの行動の認知 (FM-2), 子どもが離れていく寂しさ (FM-3), 子どもの自立-子どもの行動の認知 (FM-4), 子どもに対する気がかり感 (FM-5), 子どもを1個人の人格と認めること (FM-6) の6因子を母親の子どもに対する意識・感情の下位構造とする。これらの構造をそれぞれを下位カテゴリとして各項目のG-P分析を行った結果、全項目に0.1%水準で有意差があった。また、クロンバックの $\alpha$ 係数は.70であった。以降の分析では、これらの下位カテゴリごとに各項目の合計得点を算出し、母親の子どもに対する意識・感情の下位得点とする。

次に、内部相関を求め、下位構造間の関連を検討した結果、子どもに対する気がかり感 (FM-5) と子どもの母親への密着 (FM-2), 子どもが離れていく寂しさ (FM-3) に関連がみられた。(  $r = .46$ ,  $r = .40$ ) (表4)

## 2. 対人関係の認知の分析結果

まず、対人関係の認知の基本的構造を把握するために因子分析を行った結果、8因子が抽出された。(表2) いずれも意味解釈が明瞭であり、その項目内容から、友人関係の確立 (FP-1), 親への心理的接近 (FP-2), 親への依存 (FP-3), 夫との心理的分離 (FP-4), 夫との関係の親密さ, 共生 (FP-5), 友人との交流拒否 (FP-6), 親からの分離の欲求 (FP-7), 一人でいられない感情 (FP-8) と命名し、対人関係の認知の基本構造とした。これら8つの因子はさらに友人 (FP-1, FP-6), 親 (FP-2, FP-3, FP-7), 夫 (FP-4, FP-5) との関係にまとめることができる。それぞれを下位カテゴリとして、各項目のG-P分析を行った結果、全項目に0.1%水準で有意差があった。また、各下位カテゴリの合計得点を算出し、各構造間の内部関連性を検討したところ、親への心理的接近 (FP-2) と親への依存 (FP-3) との間に  $r = .54$  で正の相関がみられ、友人関係の確立 (FP-1)

と友人との交流拒否 (FP-6) に  $r = .46$ , 夫との心理的分離 (FP-4) と夫との関係の親密さ・共生 (FP-5) の間に  $r = .24$  で負の弱い内部相関がみられた。クロンバックの  $\alpha$  係数は .58 であった。

このように対人関係の認知の構造は明らかとなったものの、対人関係の状態、感情、欲求などが構造上、明確に区別できていないし、信頼性にも問題が残る。これは対人関係を捉え、解釈する上での理論的枠組みの弱さであるように思われる。この点はこれからの課題である。

### 3. 母親の子どもに対する意識・感情と対人関係の認知の関連

それぞれの調査において明らかにされた下位構造の関連を検討したところ、次のような関連が示唆された。一人でいられないという感情 (FP-8) が育児不安や負担 (FM-1), 子が離れていく寂しさ (FM-3), 子どもに対する気がかり感 (FM-5) と関連していること ( $r = .20$ ,  $r = .26$ ,  $r = .26$ ), 親への心理的接近 (FP-2) と子が離れていく寂しさ (FM-3) に関連が示唆された ( $r = .24$ )。さらに育児不安・負担 (FM-1) は夫との関係の親密さ・共生 (FP-5) と負相関がみられ、また夫との心理的分離 (FP-4) とは正の関連が認められること ( $r = -.16$ ,  $r = .24$ ), また、夫との心理的分離は子どもを1個の人格と認めること (FM-6) と関連していること ( $r = .26$ ) などから、夫との関係の認知が子どもに対する意識・感情と関連していることを窺わせる。

### 4. 個人の人格特徴の分析結果と母親の子どもに対する意識・感情の関連

因子分析の結果、7因子が抽出されたがそのうち第4因子までが先行研究における男性性項目 (BM) と女性性項目 (BF) で、第5因子が中性項目であった。第4因子までの因子負荷を表3にまとめた。第3, 第4因子はそれぞれ女性性=対人的な柔らかさ, 男性性=力量, として第1, 第2因子と構造的に区別されると考えられる。このうち、「21. 有効的である」「14. 嫉妬深い」は先行研究においては中性項目とされているので、因子としての意味

表 1 : 母親の子どもに対する意識・感情：因子分析による結果 (数値は因子負荷)

	FM-1	FM-2	FM-3	FM-4	FM-5	FM-6	共通性
<b>Factor 1(FM-1): 育児不安・負担-母親役割に対する否定的感情</b>							
1. 母親になったことで気持ちが安定して落ち着いた。	.45	.07	.35	-.02	.30		.64
3. 母親であることに生きがいを感している。	-.44	.10	.55	-.06	.18		.58
6. 子どもを育てることが負担に感じられる。	.72	-.01	-.09	-.13	-.08		.54
8. 自分の関心が子どもにばかり向いて、視野が狭くなる。	.54	.25	-.25	-.03	-.03		.44
9. 自分に自信がなくなることがある。	.72	.18	.13	-.12	-.01		.58
10. 育児に携わっている間の中から取り残されていくように思う。	.73	-.05	.05	.08	.17		.59
12. 育児ノイローゼになる心境に共感できる。	.54	.17	.02	-.03	.22		.43
14. 子どもがいなければよかったと思う。	.54	-.05	.01	.09	.27		.46
<b>Factor 2(FM-2): 子どもの母親への密着-子どもの行動の認知</b>							
20. 子どもは、母親のあとをついてまわったりしてなかなか離れない。	.05	.72	.03	-.20	.01		.58
22. 子どもは母親をひとりじめにしよります。	.11	.68	.03	.14	-.29		.56
24. 子どもは家にいる時でも母親の姿が見えないと気にする。	.06	.80	.06	.01	.15		.68
25. 母親が外出する時、子どもは家にいることを嫌ったり、ぐずぐず言ったりする。	.00	.73	.05	.04	.14		.57
<b>Factor 3(FM-3): 子どもが離れていく寂しさ</b>							
4. 私がいなくて寂しい子どもに思わない。	-.06	.14	.61	.14	.28		.50
7. 親の手がかかなくなっていくことに寂しさを感じる。	.14	-.12	.67	-.04	.08		.52
11. 子どもが赤ちゃんだった頃がたまらなく懐かしい。	.20	.08	.64	-.10	-.05		.53
17. 私がいなくて困ると子どもに思わない。	.01	.13	.67	.12	.18		.56
18. いつまでもあんなに可愛くなくはない。	.02	.20	.69	.03	-.22		.58
<b>Factor 4(FM-4): 子どもの自立-子どもの行動の認知</b>							
21. 子どもは、母親の助けを借りず自立することでも自分でやろうとする。	-.07	-.07	.06	.84	.06		.74
23. 子どもは、母親が助けようとするのを拒んで自分でやろうとする。	-.04	.03	-.00	.86	.04		.77
<b>Factor 5(FM-5): 子どもに対する気にかかり感</b>							
2. 家にいる時は、いつも子どもの姿が見えるように注意している。	-.02	.18	.13	.07	.80		.71
13. 子どもをみては、まだまだ危なっかしくて自分がそばにいてやらなければと思う。	.07	.56	.26	-.45	.19		.47
15. 子どもと離れていると、子どものことが気にかかると。	.18	.37	.26	.20	.33		.39
<b>Factor 6(FM-6): 子どもを1人の人格と認めること</b>							
5. 子どもをみては、別の1人の人間という感じがする。					.72		.65
16. 子どもには子どもの生き方があり子どもの人生は子どもが選択していくものだ。					.69		.55
19. 子どもに対しては、親というよりも共に生活している仲間という気持ち強い。					.77		.69

\*第7 Factor

表 2 : 対人関係の認知の因子分析結果 (数値は因子負荷)

	FP-1	FP-2	FP-3	FP-4	FP-5	FP-6	FP-7	FP-8	共通性
<b>Factor 1(FP-1): 友人関係の確立</b>									
1. 私には一緒にいるととても安心できる友達がいる。	.87	-.01	.06	.00	.01	-.21	.10	-.02	.82
6. 私のことをよく知っていて、わたしの考えをわかってくれる友達がいる。	.87	.05	-.09	-.04	.06	-.21	-.04	.11	.83
14. 私にはなんでも話せて、信頼できる友達がいる。	.87	.07	.03	.04	.04	-.22	-.03	.05	.82
<b>Factor 2(FP-2): 親への心理的接近</b>									
3. 結婚を機に親とでは気持の上で距離が近くなった。	.20	.63	.32	-.08	-.04	.09	-.16	-.03	.59
9. 子どもを持ってから親のあり方がわかるようになったと思う。	-.06	.85	.03	.03	.07	-.09	-.06	.09	.76
15. 子どもを持ってから親の大変さがわかるようになった。	-.05	.81	.00	.11	.12	-.15	.00	.09	.72
18. 結婚してからの方が親に相談しやすくなったと思う。	.14	.59	.43	-.08	-.09	.08	-.09	.00	.58
<b>Factor 3(FP-3): 親への依存</b>									
2. 私は親といるときが一番落ち着く。	.21	.36	.49	-.07	-.05	.25	-.23	.17	.57
5. 結婚後あまり親に頼らなくなりました。	.14	-.04	-.72	-.12	.23	.15	-.15	-.13	.67
23. 親は私の行動を見守っていてくれていけると感じる。	.26	.29	.41	.11	.29	.14	-.37	-.10	.59
24. いつまでも親を頼っていたい。	.00	.17	.74	-.06	.07	.07	.05	-.02	.59
<b>Factor 4(FP-4): 夫との心理的分離</b>									
4. 夫と私は考えが合うところもある。	-.04	.09	.08	.72	.07	-.05	-.19	.16	.60
7. 夫と一緒にいても、たまには一人で物事を考えたりする時間をもたたい。	.21	.20	-.12	.51	-.16	-.06	.31	-.08	.49
10. 夫のいうことがいつも正しいとは限らないと思う。	-.01	-.14	.02	.77	-.11	-.07	.04	-.10	.63
11. 夫は夫、私は私でお互いに好きになりたいと思う。	.23	-.01	-.34	.41	-.31	.31	.17	-.07	.57
<b>Factor 5(FP-5): 夫との関係の親密さ・共生</b>									
20. 夫とは互いに良いところもある。	.12	.10	-.11	.09	.84	-.08	.06	-.08	.76
21. 夫といるときに最も自分らしきを感じる。	-.01	-.02	.00	-.28	.81	.06	.00	.03	.75
<b>Factor 6(FP-6): 友人との交流拒否</b>									
16. 私には夫と子ども以外の他人なら必要ないと感じる。	-.16	.02	.18	-.01	.03	.63	.08	.05	.47
17. 友人を心の底から信用するなんて私にはできないと思う。	-.33	.01	-.24	-.02	-.03	.64	.09	.06	.59
22. 友情はそれほど大切にする価値のないものだ。	-.26	-.14	.04	-.10	-.02	.59	-.05	.02	.46
<b>Factor 7(FP-7): 親からの分離の欲求</b>									
8. 私は親に自由を束縛されていると感じる。	.07	-.05	.18	-.17	.02	.21	.73	.06	.66
19. 親が親自身の生活に口をはさむことに反感をおぼえることがある。	-.03	-.16	-.07	.14	.05	-.04	.77	-.00	.65
<b>Factor 8(FP-8): 一人であられない感情</b>									
12. 一人でいるとふと寂しくなって親や友達に電話をかけたことがある。	.12	.12	.01	-.15	-.16	.06	.08	.72	.61
13. 一人でいると私は怖くなってしまふ。	-.02	.03	.08	.14	.10	.13	-.03	.79	.68



表3 BSRIの因子分析結果(数値は因子負荷)

	FB-1	FB-2	FB-3	FB-4	共通性
<b>Factor 1 (FB-1)</b>					
1. 独立独歩である。	.59	-.10	.05	-.19	.62
3. 自分の信念を守り通す。	.52	.21	.02	-.06	.47
8. 強い性格である。	.64	.14	-.19	.15	.55
12. 論理的である。	.51	.01	.23	.23	.41
15. 指導力がある。	.70	.22	.15	.17	.65
17. 勇敢である。	.56	.42	-.01	.29	.60
18. 決断が早い。	.58	.23	-.10	-.04	.45
29. 行動力がある。	.70	.34	-.05	.22	.71
30. 威厳がある。	.51	.26	.04	.29	.54
<b>Factor 2 (FB-2)</b>					
4. 明るく朗らかである。	.18	.63	.07	-.08	.59
6. 愛情豊かである。	-.04	.67	.25	-.01	.54
9. 献身的である。	.06	.77	-.04	.03	.63
13. 思いやりがある。	-.03	.71	.33	-.04	.69
16. よく気がつく。	.24	.57	.06	.21	.51
19. 暖かい人柄である。	.12	.70	.37	-.00	.75
28. 世話好きである。	.25	.59	-.05	.14	.48
<b>Factor 3 (FB-3)</b>					
21. 友好的である。	.20	.45	.53	-.09	.70
24. 乱暴なことばを使わない。	-.04	-.04	.64	.26	.57
27. ものやわらかである。	-.28	.10	.63	.02	.58
<b>Factor 4 (FB-4)</b>					
14. 嫉妬深い。	-.31	.02	-.26	.68	.68
25. 競争心が強い。	.19	.00	.13	.77	.67
26. 野心がある。	.38	.12	.10	.64	.65

表 4 : 母親の子どもに対する意識・感情と対人関係の認知, BSRIとの相関

	FM-2	FM-3	FM-4	FM-5	FM-6	FP-1	FP-2	FP-3	FP-4	FP-5	FP-6	FP-7	FP-8	BM	BF
FM-1	.14					-.20			.23	-.16	.11	.20	.20	-.21	-.35
FM-2		.22		.46	-.18								.16	-.18	
FM-3			.40	-.11		.25	.20	-.18	.10				.26		.19
FM-4				.18	.16			.12					.15	.18	.24
FM-5				-.17		.17	.24		.12				.26		
FM-6						.13		.26						.17	
FP-1						.15		.12		-.46				.16	.17
FP-2							.54			-.12	-.19		.16		.17
FP-3												-.14	.17		.26
FP-4										-.24	.12	.11			-.14
FP-5															.21
FP-6													.11		-.14
FP-7															-.20
FP-8															
BM															.35

注. いずれも有意な相関のみを取り出し, 表にまとめたものである。

は明瞭なものの、ここでは除き、第1因子から第4因子までの項目をBM項目とBF項目にまとめ、それぞれ11項目、9項目として、項目の弁別性を確かめた結果、これらのすべての項目に0.1%水準で有意差があった。クロンバックの $\alpha$ 係数は.83で、信頼性が確かめられた。BF項目とBM項目の合計得点をそれぞれBF得点、BM得点として以降の分析を行う。

次に、母親の子どもに対する意識・感情との関連を検討するため、BM得点とBF得点が共に高い群(HH)、BF得点が高くBM得点が低い群(HL)、BF得点が低く、BM得点が高い群(LH)、共に低い群(LL)、の4群に分け、群間の差異を検討した。Bemの尺度ではこの4群はそれぞれ、Androgynous, Sex Typed, Cross-Sex Typed, Undifferentiatedとタイプ分けされている。その結果、BM得点とBF得点が共に高い群(HH, N=38)は、BM得点とBF得点が共に低い群(LL, N=27)よりも有意に育児不安・負担など否定的な感情が少なく、また母親の認知した子どもの母親への密着傾向は弱い一方、母親の認知した子どもの自立の傾向が強いことが明らかとなった。(t=-5.4, 0.1%水準 t=-2.5, t=2.2 5%水準)これらの検定結果は表5に示してある。また、BF得点が高くBM得点が低い群(HL)は、伝統的な女性性役割の図式的処理を特徴とする群であると考えられるが、この群はBM得点とBF得点が共に高い群(HH)に比べて母親の認知した子どもの母親への密着傾向が強いという傾向がみられた。(t=-2.1 5%水準)

表5：HH群とLL群の母親の子どもに対する意識・感情におけるT-検定結果

		平均値	標準偏差	t-値	
FM-1	HH群	13.7	3.5	-5.35	***
	LL群	18.6	3.9		
FM-2	HH群	8.0	2.7	-2.51	*
	LL群	10.0	3.5		
FM-3	HH群	10.3	2.7	1.09	NS
	LL群	9.5	3.2		
FM-4	HH群	6.0	1.4	2.24	*
	LL群	5.1	1.8		
FM-5	HH群	8.8	1.9	-.18	NS
	LL群	8.8	1.7		
FM-6	HH群	9.3	1.9	1.00	NS
	LL群	8.9	1.7		

p < .001 \*\*\*

p < .05 \*

## 5. 重回帰分析の結果

対人関係の認知と人格特徴の各下位構造の得点を説明変数として、従属変数としての母親の子どもに対する意識・感情をどの程度説明しうるのかを検討した。ステップワイズ法による分析最終回の重相関係数(R), 決定係数( $R^2$ 自由度調整済み)および標準偏回帰係数( $\beta$ )を表6に示した。

表6：重回帰分析の結果

FM-1	育児不安・負担-母親役割に対する否定的感情		
	R = .50	$R^2 = .23$	
			$\beta$
	BF得点	- .28	***
	一人でいられない感情	.22	***
	夫との心理的距離	.20	***
	友人関係の確立	-.18	***
	親からの分離の欲求	.11	*
FM-2	子どもの母親への密着-子どもの行動の認知		
	R = .23	$R^2 = .05$	
			$\beta$
	BM得点	-.17	**
	一人でいられない感情	.15	*
FM-3	子どもが離れていく寂しさ		
	R = .43	$R^2 = .17$	
			$\beta$
	一人でいられない感情	.21	***
	親への心理的接近	.23	***
	夫との心理的距離	-.17	**
	親からの分離の欲求	.15	**
	BF得点	.15	**
FM-4	子どもの自立-子どもの行動の認知		
	R = .32	$R^2 = .10$	
			$\beta$
	BF得点	.26	***
	夫との心理的距離	.15	**
	一人でいられない感情	.13	*

## FM-5 子どもに対する気がかり感

R = .39 R<sup>2</sup> = .14

	$\beta$
一人でいられない感情	.21 ***
親への依存	.16 **
友人関係の確立	-.13 *
BF得点	.18 **
BM得点	-.14 *

## FM-6 子どもを1個の人格と認めること

R = .29 R<sup>2</sup> = .05

	$\beta$
夫との心理的距離	.26 ***
BM得点	.15 **

p &lt; .001 \*\*\* p &lt; .01 \*\* p &lt; .05 \*

10変数のうち、「一人でいられない感情 (FP-8)」が子どもを「1個の人格と認めること (FM-6)」を除くすべての母親の意識・感情に影響していることがわかる。また「夫との心理的距離 (FP-4)」が6つの母親の意識・感情の下位構造のうち育児不安・負担-母親役割に対する否定的感情 (FM-1), 子どもが離れていく寂しさ (FM-3), 子どもの自立 (FM-4), 子どもを1個の人格と認めること (FM-6) おいて説明変数として意味をもっている。この2つの変数のもつ意味は大きいといえる。これらの点については次の項でまとめる。標準偏回帰係数でマイナスの値をとるものがあり、相関係数を考慮すると安易な解釈は避けなければならないが、育児不安・負担や気がかり感は友人関係のもちかたによって影響され、子どもの母親への密着や自立の傾向は人格特徴の変数や一人でいられないという感情の強さによって、説明されることが示唆される。親からの分離の欲求が母親役割に否定的な感情や寂しさを説明しうることは、母親自身の親からの心理的分離が受容的な母親役割の認知にとって重要であるといえるだろう。

次に、HH群, LL群別にこれらの10変数による母親の子どもに対する意識・感情との重相関係数を求め、見やすくするために線グラフに表示して図1

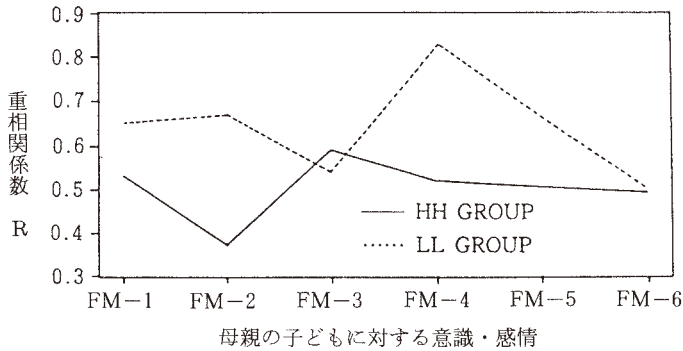


図1 HH GROUPとLL GROUPの重相関係数

に示した。ここではすべての変数を入れ込んで重回帰分析した。LL群においては、母親の認知した「子どもの母親への自立 (FM-4)」はこれらの変数において散らばりの約半分が説明されることがわかった。(R<sup>2</sup> = .51 自由度調整済み) 各変数ごとに統計的に有意な標準偏回帰係数をみると「一人でいられない感情 (FP-8)  $\beta = -.44$ 」「夫との心理的距離 (FP-4)  $\beta = .38$ 」「親からの分離の欲求 (FP-7)  $\beta = .42$ 」「親への依存 (FP-3)  $\beta = .65$ 」であり、マイナス値のFP-8は他の変数との関連によってかかわりかたがかわってくるものの、いずれも重要な変数であることが示された。一方、LL群においては、一方の極である母親の認知した「子どもの自立」傾向がこれらの変数によって予測できないことも明らかである。

#### IV. 全体の考察

以上の結果、母親の子どもに対する意識・感情は対人的関係の認知、及び人格特徴との間に関連があることが明らかである。対人関係の認知との関連においては、夫との関係が特に重要な意味をもっているように思われる。親密さと共生というベクトルとそれぞれ1個の人格であることを認め、心理的に分離するベクトルとのバランスのよさに子どもの自立の望ましい発達傾向

が示唆される。ただし、本調査においては夫との心理的距離が夫と気持ちが離れていることの意味と前述の意味の区別は難しいことが問題として残されている。

また、対人関係の認知における「一人でいられないという感情」は C. D. Spielberger の定義している特性不安 (Trait-Anxiety) の 1 つとも考えられ、比較的安定した個人の人格特徴と考えられる。このような不安傾向が育児における不安や負担、寂しさや気がかり感と関連し、特に性に基づく図式的情報処理に弱いと考えられる LL 群において複雑なかわりが示唆されていることは、母親へのサポートを考える時、特に留意すべきであろう。

親への心理的接近や親への依存傾向が子どもが離れていく寂しさ、子どもに対する気がかり感と関連していることは親の育児における意味—一般に育児の知恵を授ける人としての意味—は大きいと言えるだろう。しかし一方で、これらの母親の不安・負担や子どもが離れていく寂しさに対して、親への分離の欲求が予測変数としてはたらいっていることが示唆されていることから、親からの健全な心理的分離のもつ意味—重奏性として母親の発達を位置づけたところのもの—を捉えなおす必要があるとおもわれる。ここにも母親へのサポートを考える時、配慮すべき視点がある。

人格特徴については、BF 得点と BM 得点がともに高い群に母親役割の否定的感情が少なく、子どもの母親への密着傾向は弱い一方、子どもの自立傾向が強いという結果は Androgynous の特徴をもつ者の自我同一性の達成の早さの仮説に一致しており、性役割遂行におけるこの人格特徴のもつ意味を示唆している。特に HL 群 (Bem の分類では Sex Typed の群) では子どもの母親への密着傾向が強いという結果と合わせて考えてみると、いわゆる伝統的な女性性役割をとるものは母子の心理的分離という発達課題の達成においては困難が生ずる可能性があることを窺わせる。

E. M. Levitz (1985) らが女子学生の Separation-Individuation と親密さの関連について検討しているなかで、真の親密さは自我喪失の不安を体験することなく、他者とかわりをもつことができるということ、すなわち、強

い自己の感情 (strong sense of self) を必要とすることを指摘しているが、母親についても全く同様であろう。母親が自己についての確信をもち、夫、友人、親との関係を親密につくっていくこと、また、伝統的な性役割に基づく育児役割の遂行に囚われず、発達課題として育児を捉えなおしていくことができる時、子どもとの“よい関係”を産み出すことができるように思われる。今後、デモグラフィックな資料との関連についても明らかにすると同時に、多次元の分析によってさらに検討を加えて必要があると考えている。

### 参考文献

- Bem, S. L. 1974. The Measurement of Psychological Androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155–162.
- Bem, S. L. 1981. Gender Schema Theory : A Cognitive Account of Sex Typing. *Psychological Review*, 88, 354–364.
- Kuriyama, Y. & Ohtake, N. 1991. A study of Mothers' Perceptions of Their Children in Relation to Separation Anxiety : The Effects of Mothers' Personal Relationships and Sex Role. Presented at the Second European Congress of Psychology.
- Levine, J. B., Green, C. J. & Milon, T. 1986. The Separation—Individuation Test of Adolescence. *Journal of Personality Assessment*, 50, 123–137.
- Levits, E. L. & Orlofsky, J. L. 1985. Separation—Individuation and Intimacy Capacity in College Women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 156–169.
- 高橋 蔵人 1989. 青年期における分離个体化に関する研究. *心理臨床学研究*, 第7巻, 4-14
- 山口 素子 1985. 男性性・女性性の2側面についての検討. *心理学研究*, 第56巻, 215-221



**A STUDY OF MOTHERS' PERCEPTIONS OF THEIR  
CHILDREN IN RELATION TO SEPARATION  
ANXIETY: THE EFFECTS OF MOTHERS'  
PERSONAL RELATIONSHIPS AND SEX ROLE**

(English Résumé)

Yoko Kuriyama, Takiko Ijiri,  
Mari Idei and Masako Kawazu

The main purpose of this study was to explore the factors affecting Japanese mothers' perceptions to their children in relation to separation anxiety. Two hundred and ninety-two mothers were asked to rate in items on three questionnaires using a four point scale. The first questionnaire consisted 25 items related to mothers' perception to their children. The second questionnaire consisted 24 items and focused on mothers' personal relationships with their friends, parents, and husband. The third questionnaire focused on sex role characteristics of mothers and consisted 30 items from the modified Bem Sex Role Inventory.

A factor analysis of the data resulted in the extraction of six factors identified as follows: negative feeling towards the maternal role (FM1); mother's perception of their child's attachment behavior (FM2); mother's loneliness at the prospect of losing her child (FM3); mother's perception of her child's independence (FM4); mother's concern about her child (FM5); and perceiving the child as an individual (FM6). Regarding personal relationships, eight factors were identified as follows; establishment of friendship (FP1); empathy with parents (FP2); dependency on parents (FP3); psychological detachment from husband (FP4); intemacy with husband (FP5); avoidance of friendship (FP6); need for detachment from parents (FP7); and

separation anxiety (FP8). Correlation and multiple regression analysis suggested that separation anxiety (FP8) was related to the mother's negative feelings, loneliness, and on the other hand psychological detachment from husband (FP4) was related to perceiving the child as an individual (FM6).

From the modified Bem Sex Role Inventory, two basic types of mothers were identified — (1) androgynous and (2) sex-types (Japanese traditional sex role type). Sex-typed individuals showed negative feelings toward maternal role and were more negative with respect to perception of their children than androgynous type individuals. On the other hand, androgynous individuals differed significantly from sex-typed individuals regarding perception of their child's independence.